



川崎歴史ガイド

# 津久井道と 杵形城址



# 津久井道と枡形城址

●エビネ  
●ジュウニヒトエ

●エビネ  
●ジュウニヒトエ

「津久井道」は、登戸から西へ今の世田谷町田線とほぼ同じように生田、柿生、鶴川に向い、さらにその先は鶴見川の上流に沿つて橋本（相模原市）から津久井地方に至る道です。同じ道を東へ進むと、多摩川を渡り世田谷を通り、三軒茶屋で大山街道と合流して赤坂御門まで続きます。多摩川から西の地方では江戸道と呼んでいたようですが、津久井道の往来が頻繁になつたのは、津久井・愛甲地方の絹がこの道を経由して直接江戸へ送られるようになつた頃、江戸時代も末になつてからのことです。それまで絹を農家などから集めた問屋は、八王子の市場に出荷していたのですが、そこでは八王子の勢力が強く、津久井・愛甲地方の問屋は安値で買え、力を増してきた津久井・愛甲側の人々は

直接江戸へ絹を送ることを考え、注目したのがこの道です。文化年間、明治に変わる数十年前のことでした。以後この道は江戸へ絹を送る道「シルク・ロード」として急速に脈い始めたのです。同時に黒川炭などの特産物も目立つて多く運ばれるようになりました。東海道や中原街道、大山街道のように制度的に整備された道ではなく、人々の生活、商人の活発な活動を通じて独特の役割を果たすようになつた商業路だったのです。

しかし、幕末の安政の開港に伴い、絹が横浜へ運ばれるようになると、江戸向けの物資も減り、津久井道を通る人馬も少くなつて、この道の様子も変わつていきます。

津久井道から分かれて枡形城址に向う道は、古く鎌倉時代、山頂に枡形城が開かれ以来をめぐる幾度もの争いの足跡が刻みこまれています。枡形道と呼ばれたこの道は、多摩丘陵の緑の中にあつて、今では訪れる人に、ひとときの安らぎを与えてくれる貴重な散歩道になつています。

津久井道、枡形道、いずれも時代の移り変わりと道の果たす役割を考えさせてくれます。

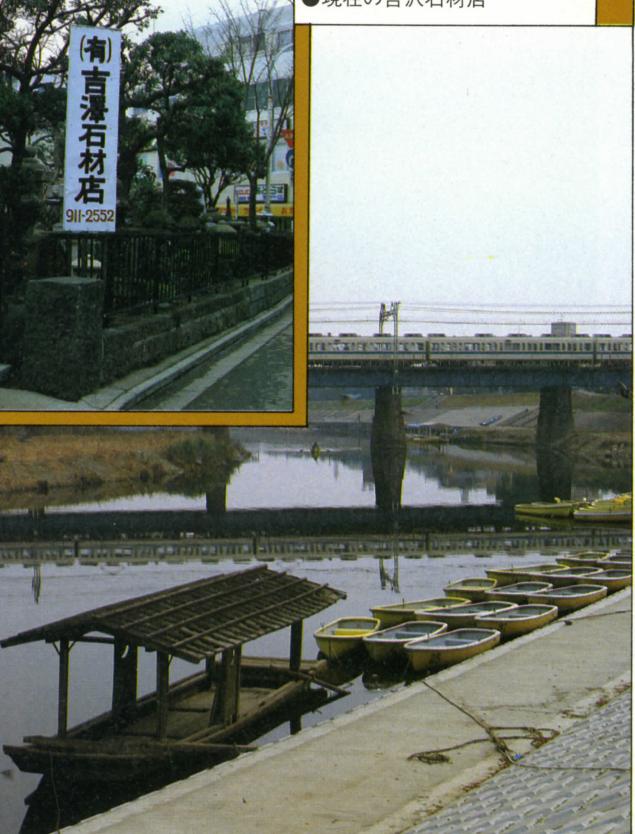
直接江戸へ絹を送ることを考え、注目したのがこの道です。文化年間、明治に変わる数十年前のことでした。以後この道は江戸へ絹を送る道「シルク・ロード」として急速に脈い始めたのです。同時に黒川炭などの特産物も目立つて多く運ばれるようになりました。東海道や中原街道、大山街道のように制度的に整備された道ではなく、人々の生活、商人の活発な活動を通じて独特の役割を果たすようになつた商業路だったのです。

# 登戸の渡しと水道橋

(有)吉沢石材店

911-2552

●現在の吉沢石材店



●渡し場があった付近。すぐ下流が石屋河岸だった

## 石屋と石屋河岸

が荷揚げされていたのです。

帆船に積まれて東京湾からさらに多摩川をさかのぼり、ここで陸揚げされた石材は、石仏、石橋、墓石などに使われてきました。今でも調布市深大寺の宝篋印塔や、江の島奥津宮の燈籠、伊勢原普濟寺の多宝塔などに「吉沢」の銘が刻まれて残っています。このことからも、多摩川の水運と街道の便を利用したこの店の商圏がいかに広範囲にわたっていたかがわかります。

多摩川の堤防から少し進み、南武線を横切ると、すぐ右側に吉沢石材店があります。江戸後期から続く歴史をもつています。

この石屋さんの多摩川よりに今でも用水の流れがあります。稲城市大丸で多摩川から取水された大丸用水の残水を集め、再び多摩川に戻すための水路でした。この用水が多摩川に注ぐところにできていた淀みは、石屋の船着き場として使われていました。石屋河岸と呼ばれたその河岸から、伊豆の河津真鶴の小松石など各地からの石材

●船頭小屋(日本民家園)

多摩川に橋がかかるまで、川崎と東京を結んだのは渡し舟です。下流から六郷、矢口、丸子、二子、そして登戸、菅の渡しなどがありました。登戸の渡しには主に人を乗せる舟と、これよりひとまわり大きくて荷車などを運ぶ舟があり、船頭が川の流れを見ながら舟を巧みに繰っていたものです。渡しを唯一の交通手段として、夏の桃や秋の多摩川梨、禅寺丸柿といった季節の果物が川を渡り、津久井の絹や黒川炭など特産物が東京に運ばれました。

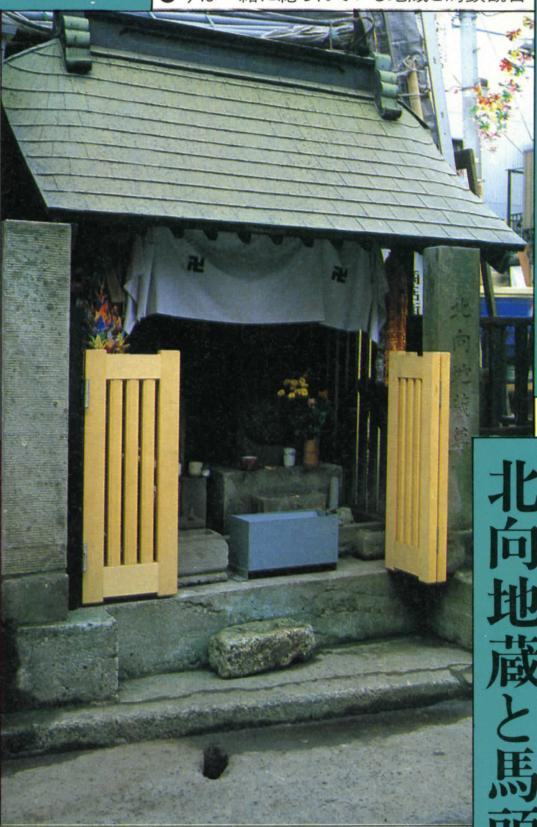
な仮の橋が置かれたようです。大正に入つて本格的な架橋への気運が盛り上がり、これがきっかけとして、ようやく現在の多摩水道橋が完成したのは昭和28年のことです。この橋は直径二メートルもある水道管を橋の下にだきこんでいて、今も東京に向けて大量の水が送られ、世田谷一帯で使われています。

●水道管を抱きこんだ多摩水道橋





●昔の柏屋(昭和2年)



## 北向地蔵と馬頭観音

きたむきじぞう

ばとうかんのん

津久井道から登戸駅へ折れる四つ角に祠があつて、中に地蔵尊と馬頭観音が祀られています。

地蔵尊は子どもの守り神として信仰されています。

「北向地蔵」は珍しいので特別のご利益があるとされ、子育

て地蔵として親しまれています。

馬頭観音は、聖観音、千手観音、十

一面観音、如意輪観音などと並ぶ六觀音の一つです。死後の六道の世界のうち、畜生道に立つて苦を救つてくれる

観音として信仰されたものが、宝冠に馬頭をつけたその姿から、とくに江戸

時代には馬の保護神としても広く信仰されました。農耕や荷物の運搬で倒れた馬の靈をなぐさめるため、馬頭観音を右に刻んで道端に祀ったものが、今でも各地に残っています。正式に三面

の菩薩として彫られたこの馬頭観音は市内でも立派なもの一つです。これは文政10(1827)年にこの地の馬方の総元締だた登戸村源之助、高井戸

村鍋五郎、大丸村大八が中心となつて建てたのですが、台座にはこのほか浅草や八王子、府中、相模などの人の名も見られ、登戸が荷物輸送の要所だったことがうかがわれます。

## 登戸宿と柏屋

登戸は、中原街道の小杉宿や大山街道の溝口宿に比べ相当遅れて、江戸時代の半ば過ぎから発達した宿でした。

しかし、その後は急速に発展し、やがて両宿を凌ぐ賑わいをみせます。

天保9(1838)年の「商人書上」は、

上州屋玉川楼という、多摩川を下する筏乗りを泊める筏宿があつたことも一つの特徴でした。

農家のかたわら旅人を泊めた柏屋は、

明治の末頃には、多摩川の行楽客や釣

人相手の料理屋を兼ねるようになります。

それによると、居酒屋、煮

資料です。このことから、小杉は小規

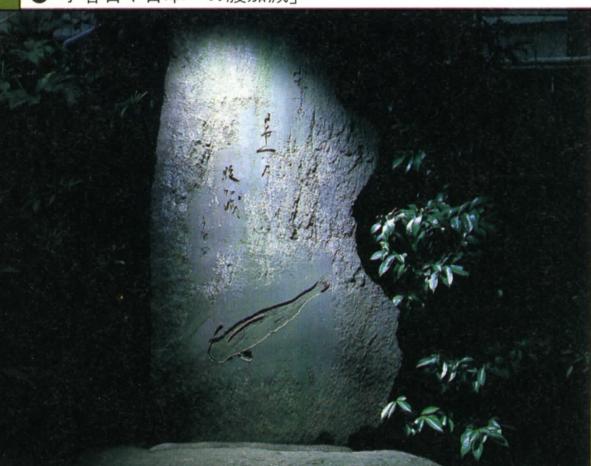
模で静かな宿、溝口は各種商店の並

だ整った形の宿だったのに対し、登戸

は盛り場的な宿だったと言うこともで

ます。

●「小春日や日本一の腹加減」



# 供養塔と水争い

日蓮宗善立寺に「用悪水出入一件」という宝暦13(1763)年から享和元(1801)年に至るまでの古い記録が残っています。

江戸時代、二ヶ領用水にその流域が受けた恩恵は測り知れませんが、それだけにこの用水の分配をめぐる上流と下流の争いはしばしばでした。登戸村も例外ではなく、この古文献には、上流の菅生(かねお)・五反田(ごなんた)の三村との争い、また、下流の稻毛(いなげ)、川崎(かわさき)五十二ヶ村との争いが四十年近くにわたって記録されています。その間、解決のため

江戸へ赴いたり、代官の使者を迎えたり、関係者の苦労はたいへんだったようです。善立寺の入り口にあるひとつわ背の高い供養塔は、そんな水争いの中で名主や年寄などと一緒に奔走していた玉川屋井上弥兵衛という人が、心労のすえ亡くなつた妻の供養に建てたものです。

明治になつて学制が施行されたとき、登戸村最初の小学校「登戸学舎」がおかれたのはこの善立寺でした。当時の住職池田日孝も教鞭をとつたと記録されています。

●供養塔



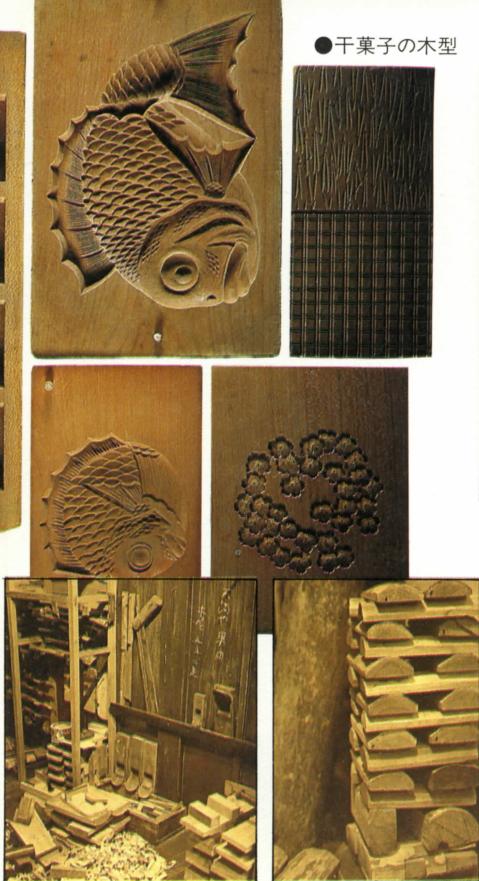
## 登戸の下駄づくり

運び市場に流す。千菓子づくりも同じように行われていたということです。

明治時代、津久井道に沿うこのあたりには吉田下駄店、手塚下駄屋、加登金、武藏屋といった大きな下駄屋がありました。その頃は庭にコウラ(ナタ)で割つて大体下駄のサイズにしたもの

をきれいに並べて積んだ光景がよく見かけられたという話です。しかし、桐材不足や機械化などにより、登戸の下駄づくりも昭和10年ごろからは次第に見られなくなつてしましました。

●千菓子の木型



●かつて盛んだった下駄づくり

小杉宿や溝口宿より遅れて発展した登戸も、江戸時代の末頃には製造業の戸数がずっと増えます。下駄づくり、千菓子づくり、紙漉き、馬鞍づくり、提燈づくりなど種類も豊富でした。登戸の下駄づくりは、多摩丘陵の桐材を主としたもので、天保9(1838)年の「商人書上」によると、十四戸もあつたとされています。職人たち親方を中心とした同職仲間的な関係で結ばれていたようです。でき上がつた下駄を親方のところに持ち込むと、問屋も兼ねた親方がそれをまとめて江戸へ

# 稻荷社と左官職人

江戸時代に田畠の少ない農家が、農閑期の仕事として始めた左官の仕事でした。

江戸時代に田畠の少ない農家が、農閑期の仕事として始めた左官の仕事でした。このあたりでとれる良質の土にも恵まれ徐々に本業化。登戸の左官屋といえど東京、横浜さらには八王子、埼玉方面にまで評判が伝わっていたほどでした。

近頃では土蔵を新築することもなくなりましたが、昔 左官の仕事といえば、土蔵づくりや家の壁塗りでした。下地から始まり、乾かしてはその上に塗り上げる工程を、季節や陽気を選び

ながらくり返し、一つの土蔵をつくるのに二年もかけたといわれます。登戸の鎮守稻荷社は、その頃の左官職の意気込みや腕前を知る上で格好の建物です。かつては四方の壁が、漆喰の彫刻で飾られていましたが、これは嘉永年間（1858～1859）のもの。左官の名人といわれた伊豆の長八の高弟で江戸・芝の庄太郎の作と伝えられており、関東大震災にも耐えた東西の壁が現在まで残っています。また、軒下の小壁の雲や狐の浮き彫りは地元の左官浜二郎の作と伝えられています。



## 光明院と太子堂

光明院は天文年間に開かれた真言宗のお寺です。江戸後期の役人で文人でもあった太田南畠（蜀山人）が多摩川の堤防調査の役目でこのあたりを訪れたときのようですが、文化6（1809）年の「調布日記」に記されています。

光明院は天文年間に開かれた真言宗のお寺です。江戸後期の役人で文人でもあった太田南畠（蜀山人）が多摩川の堤防調査の役目でこのあたりを訪れたときのようですが、文化6（1809）年の「調布日記」に記されています。

光明院は天文年間に開かれた真言宗のお寺です。江戸後期の役人で文人でもあった太田南畠（蜀山人）が多摩川の堤防調査の役目でこのあたりを訪れたときのようですが、文化6（1809）年の「調布日記」に記されています。

光明院は天文年間に開かれた真言宗のお寺です。江戸後期の役人で文人でもあった太田南畠（蜀山人）が多摩川の堤防調査の役目でこのあたりを訪れたときのようですが、文化6（1809）年の「調布日記」に記されています。



●何層も塗り上げた土蔵



●稻荷社の浮彫り



●稻荷社と漆喰の彫刻



# 丸山教本庁の文学碑

丸山教は、富士信仰のひとつだった丸山講をもとに明治初年、登戸の伊藤六郎兵衛が興した新しい宗教です。当時は神道を国教とし、民間宗教は圧迫を受けた時代でした。富士登拝を中心させられたり、賽銭をとり上げられたりという官憲の弾圧が続いたにもかかわらず、天地自然を尊ぶ丸山教は農民の心をとらえ、「世直し宗教」としてたいへんな勢いで広がっていました。信者の数は一時百数十万人にまで達したといわれるほどです。

ところで、丸山教本庁入口には、見事な花をつける藤の棚がありますが、北原白秋は多摩川の風物をうたった長詩「多摩川音頭」の中でこの藤の花を詠みこんでいます。

『多摩の登戸』  
六郎兵衛さまよ  
藤は六尺  
藤は六尺  
いま盛りへ  
境内にはこの  
一節を刻む歌碑

句碑の句の中より雲雀鳴きいでよ  
ひとりだけ残りし信者炉辺親し  
（丸山教三世・伊藤葦天）  
の句碑があります。

●丸山教本庁



●丸山教の絵馬



## 多摩川の筏流し

江戸末期の登戸の急速な発展には多摩川の筏流しも大いに関係しています。

当時の江戸ではたび重なる大火もあって、材木の需要が増すばかりでした。材木は関東一円のほか、尾張や紀伊などからも供給されていました。その中で重宝がられたのが、大火の後の急な需要などに、多摩川を利用していち早く運ばれた奥多摩地方の青梅材です。

スギやヒノキの角材あるいは足場用の丸太は藤づるを使って組まれ、出来上がった筏は一枚一枚と数えられます。

秋の彼岸から翌年の初夏頃まで行われる筏乗りと筏流し風景(大正初期)——五日市町郷土館資料

●筏流しに関する廻状



●橋の裏側。「天保十五年」の文字



●紀伊国屋

## 五反田節と紀伊国屋

小泉橋を渡るとすぐ府中県道と交差しますが、この先の大通橋あたりまでは榎戸と呼ばれ、登戸と生田の境にあります。『新編武藏風土記稿』にも見られる榎の大木は、惜しくも明治14年の火災がもとで枯れてしましました。

榎戸のあたりはかつて、旅館居酒屋、めし屋、菓子屋、たび屋、ふるい屋、仕立て屋、紺屋などが並び、大そう賑っていたところです。

さて、紀伊国屋は文化間に創業しました。ちょうど津久井の絹問屋が王子の市場への出荷をやめて、この津

久井道経由で直接江戸に荷を運ぶようになった頃です。造り酒屋と旅籠を兼ね、さらに料理の味のよさも評判になつて繁盛しました。

昔からこの地に伝わり、めでたい時に唄われる「これさま」を元歌にした「五反田節」にも当時の紀伊国屋が歌いこまれています。

「これほどの旅のつかれを 五反田の酒屋で忘れたが 忘れてもわすがたなや 五反田のさかやの小娘子 鳥なれば巢もなかけたや 五反田のさかいのあの榎えの木にわづたがからまる娘にわ殿ごがからまるへ



●現在の小泉橋

津久井道を西に進むと、小泉橋で二ヶ領用水を渡ります。この用水は徳川家康の命により、多摩川水系最古の農業用水路として慶長16(1611)年に完成されたものです。

小泉橋がかけられたのは天保15(1843)年。土地の豪農小泉利左衛門が登戸にかけた三十三にのぼる石橋の一つです。明治33年になってこの橋を改修したのは、四代後的小泉弥左衛門という人。古い石橋を生かしながら今のようない形にくりかえたもので、橋の裏側にはこうした歴史を物語る天保、明

治の両碑文が彫られています。

府中県道と交わるこのあたりは、また丘陵地への出入口でもあり、交通の要所として繁華な所でした。橋の付近には二つの銀行がたち、石橋銀行は大正の初めまで続きました。

小泉橋は、その昔丸山講中が富士登拝する時の集合場所でもありました。橋のたもとにある大きな庚申塔には、丸山教という名のもとになった山の印が見られます。

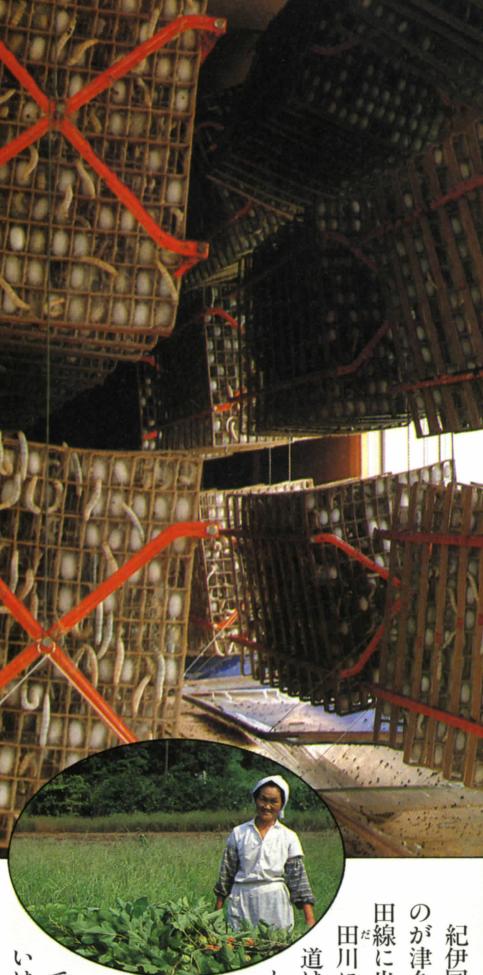


●めでたい席で歌われる「これさま」

# 二ヶ領用水と小泉橋

# 大道橋と「そくざし」

紀伊國屋のすぐ先で右に折れて進むのが津久井道です。ここから世田谷町田線に出てそれを少し西に進むと五反田川にかかる大道橋があります。



くざし（即座帥）でした。  
そくざしは繭の仲買人のこと  
で、登戸、宿河原、長沢、ある  
いは馬絹や右川あたりまで買付け

精を出しました。  
ほかに、馬宿、たばこ屋、床屋、傘屋、車大工などが並ぶ賑かな追分でした  
が、今では伊勢参りの記念碑と道標が残るばかりです。

## くらやみ坂

五反田川にかかる松本橋を渡り、枡形城址へ向う道は急な登り坂です。昔、

この坂が両側から生い茂る木々に陽光を遮られ、昼なお暗い坂だったことから、土地の人々はここを「くらやみ坂」と呼んでいました。

くらやみ坂を登つて行くこの道は、もともと枡形道と呼ばれ、頂上にあつた鎌倉時代の山城、枡形城への道として開かれたもの。城の正面に向う道で、いわば大手門への道でした。枡形城争奪戦のたびに戦仕度の武士たちが慌しくここを往来したのは八百年も昔のこと

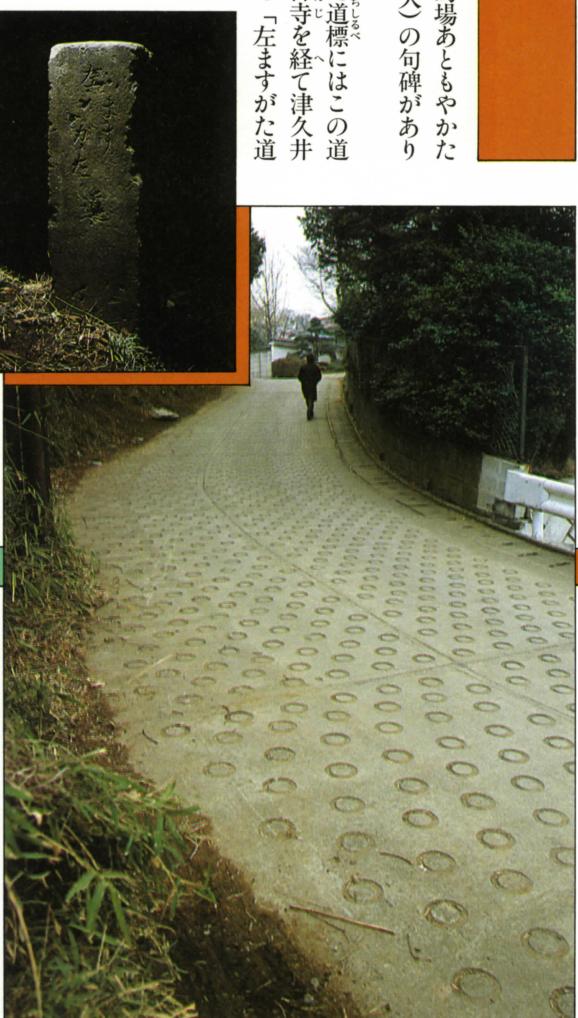
とです。城址には「馬場あともやかたのあとも秋の風」（葦天）の句碑があります。

松本橋近くにあつた道標にはこの道と、生田、柿生、王禅寺を経て津久井方面へ向う道を示して「左ますがた道

右王禅寺道」と彫

られています。明治39年に置かれたこの道標は、いま、坂を少し上った広福寺の門前に保存されています。

●くらやみ坂と道標



●写真は繭をつくる蚕と桑の葉

●広福寺境内と重成像



## こうふくじと韋馱天社

くらやみ坂を少し上ると右側に広福寺があります。平安時代初期に開かれ、鎌倉時代に稻毛三郎重成が長弁阿闍梨を招いて中興したという真言宗のお寺です。当時、重成の館として使われていたというこの寺の本堂には木彫の重成像と一族の位牌が祀られており、境内には重成の墓といわれている五輪塔もあります。

本尊の聖觀世音菩薩立像は鎌倉時代、地蔵菩薩立像は平安時代のもの。いずれも等身大の木造で、神奈川県の重要文化財に指定されています。

広福寺の境内から西に下りると、すぐ正面に「天神社」と書かれた鳥居と名所図会に「韋馱天社」として描かれているこの神社は昔からこのあたり一円の氏神でした。近頃では、「韋馱天ばしり」にあやかろうと、ご利益を求めるマラソン選手などの参詣姿も見られます。



## 戸隠不動と自然探勝路

戸隠不動堂は昭和初期の建物ですが、本尊はもともと信州戸隠山の戸隠神社に安置されていたものです。戸隠神社は山岳信仰に始まり、後に修験道の道場として栄えたところです。

不動堂のすぐ右手から下っていく道は、谷間をぬって歩く自然探勝路として整備されています。緑に囲まれた湿地帯に厚い板で道が作られていたり、見晴らしのきく芝生広場があつたりで、多摩丘陵の草花や木々を楽しむに最適な散策路です。歩く足下には春秋の七草をはじめ、ホタルブクロ、ヒトリ

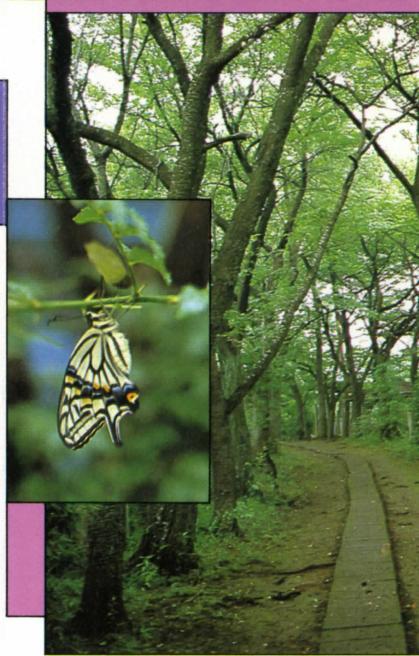
シズカ、リンドウ、ナンバンギセル、ヤマユリなど数百種もの草花が自生し、タマノカンアオイというたいへん貴重な植物も見られます。また見渡すと、

ツツジ、ナンテン、ヤマブキなどの灌木類やヤマザクラ、マツ、スギ、ヒノキ、シラカシ、クリ、コブシ、ケヤキなどが入り混った雑木林が広がり、一帯には昆虫類も多く、緑の中のあちこちから野鳥のさえずりが聞こえてきます。



●タマノカンアオイ



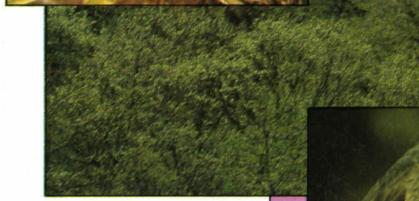


●多摩丘陵の自然

## 枡形城址と多摩丘陵

多摩丘陵の高みからは多摩川の流れと、その向うに広がる雄大な関東平野を展望することができます。この眺望のよさは、昔の豪族たちにとって城を築くのに好都合でした。鎌倉時代にはいくつもの山城や丘城が丘陵地につけられました。今の市域にも枡形城、小沢城といつた山城や作延城、亀井城、有馬城、井田城、加瀬城などの丘城が多摩川沿いの丘陵地に連なつていたといわれます。どの程度の城だったのかはつきりしませんが、小沢城については、空堀、物見櫓、土塁などの跡が発見されています。

多摩丘陵は、東京都南西部と神奈川県北東部に三日月形に広がる丘陵です。面積は約三百平方キロメートル、高さは西部の約三百メートルから東へ緩く低下し、小田急電鉄が横切る百合丘付近で約百メートルとなります。地質的には、海底に堆積した海成層で、下層の飯室泥岩層（二百万年前）と、鴛鴦沼砂礫層（三十万年前）の二層からなり、その表面を、後に火山の噴火により火山灰が堆積してできた関東ローム層（赤土）がおおっています。標高八三メートルの枡形山もこの三つの地層から出来ています。頂上の枡形城址から日本民家園へ下りる道沿いには、ところどころ地層が露出していて、現在から二百万年前までの大地の歴史を辿ることができます。



## ●参考文献

近世期における脇往還宿場町の発達(東京教育大学地理学研究報告第2集)●浅香幸雄・S33

川崎市史●川崎市■同・S43

新編武藏風土記稿(第三巻)■雄山閣・S45

津久井街道●川崎市立稻田図書館■同・S46

文化かわさき6号●川崎市総合文化団体連絡会■同・S55

江戸名所図会(中巻)■角川書店・S55

かわさき散歩●川崎市総合文化団体連絡会■同・S55

わが町の歴史川崎●村上直■文一総合出版・S56

神奈川ふるさと風土図●萩坂昇■有峰書店新社・S57

多摩川の筏(森林文化研究第5巻第1号)●平野順治・S59

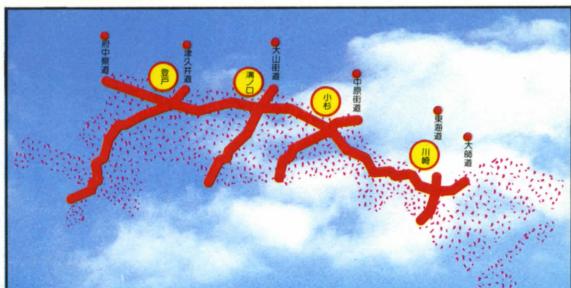
無断転載を禁ず



## ●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク

このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先がつくりだしたものですが、それを再び映しだすのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映しだす鏡です。ガイド用の“柱”の上に、それが必ずついています。

デザイン=粟津 潔



ガイドパネルデザイン=粟津 潔+清水まこと

Design=粟津デザイン室 Photogaphy=小池 汪

財団法人川崎市文化財団

〒210-0007 川崎区駅前本町12-1 タワーパーク3F

☎044-222-8821 FAX222-8817 頒価=100円

印刷=大日本印刷株式会社

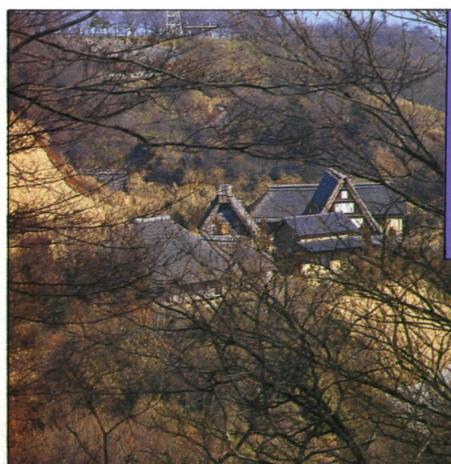
昭和60年3月発行



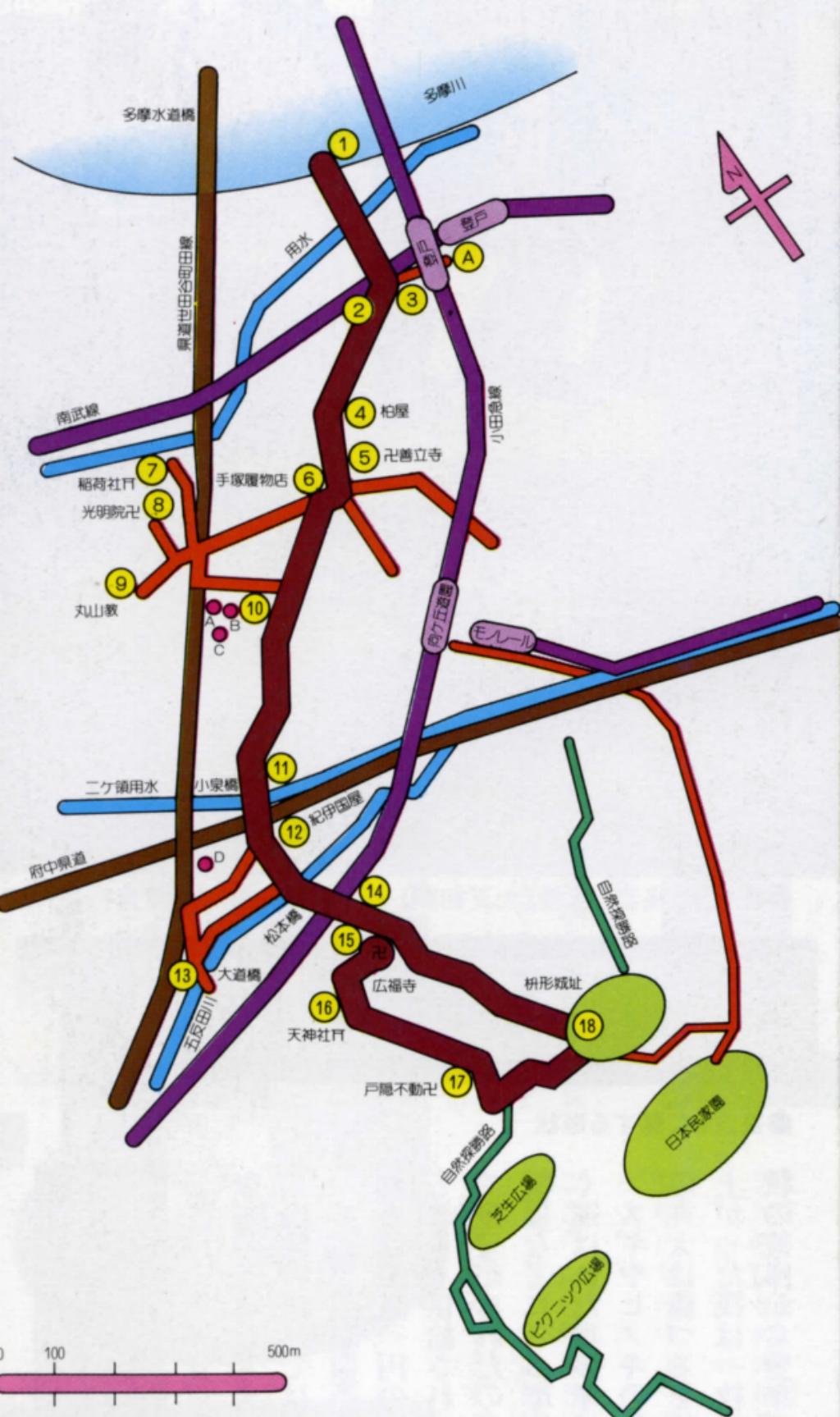
●柏形城址からの眺望。丘陵地にあった鎌倉時代の山城・丘城



●露出した地層



日本民家園は、全国  
数の野外博物館として知  
られ、重要文化財級の古  
民家が各地から移築復原  
されています。



## 川崎歴史ガイド

コース=登戸の渡し～松本橋～桙形城址～民家園

- |             |              |
|-------------|--------------|
| Ⓐ—津久井道と桙形城址 | ⑫—五反田節と紀伊国屋  |
| ①—登戸の渡しと水道橋 | ⑬—大道橋と「そくざし」 |
| ②—石屋と石屋河岸   | ⑭—くらやみ坂      |
| ③—北向地蔵と馬頭観音 | ⑮—広福寺と稻毛三郎   |
| ④—登戸宿と柏屋    | ⑯—天神社と韋駄天    |
| ⑤—供養塔と水争い   | ⑰—戸隠不動と自然探勝路 |
| ⑥—登戸の下駄づくり  | ⑱—桙形城址と多摩丘陵  |
| ⑦—稻荷社と左官職人  |              |
| ⑧—光明院と太子堂   | A—多摩区役所      |
| ⑨—丸山教本庁の文学碑 | B—多摩市民館      |
| ⑩—多摩川の筏流し   | C—多摩図書館      |
| ⑪—二ヶ領用水と小泉橋 | D—多摩警察署      |

# 津久井道と枡形城址ルート



□パネル⑤登戸宿と柏屋



□パネル⑳枡形城址と多摩丘陵



□パネル①総合案内板

## ■川崎歴史ガイドパネル所在地

- ① 津久井道と枡形城址ルート総合案内
- ② 登戸の渡しと水道橋
- ③ 石屋と石屋河岸
- ④ 北向地蔵と馬頭観音
- ⑤ 登戸宿と柏屋
- ⑥ 供養塔と水争い
- ⑦ 登戸の下駄づくり
- ⑧ 稲荷社と左官職人
- ⑨ 光明院と太子堂
- ⑩ 丸山教本序の文学碑
- ⑪ 多摩川の筏流し
- ⑫ 二ヶ領用水と小泉橋（兼 二ヶ領用水ルート）
- ⑬ 榎戸の堰（二ヶ領用水ルート）
- ⑭ 五反田節と紀伊国屋
- ⑮ 大道橋と「そくざし」
- ⑯ くらやみ坂
- ⑰ 広福寺と稻毛三郎
- ⑱ 天神社と韋馱天
- ⑲ 戸隠不動と自然探勝路
- ⑳ 枝形城址と多摩丘陵